

「学区の【バルドル・クラス】所属、ニイナ・チュールです! 今日から派閥体験、よろしくをお願いします!」

ブラウンの髪と、一部が翡翠色に染まった前髪。そして赤葡萄酒色の襟締と一緒に揺らし、半妖精の少女は勢いよく頭を下げた。

ベルやヘスティア達の目の前、『竈火の館』の居室で。

「本当に『学区』から生徒がやって来るとは…」

「勧誘までされてくるなんて、流石ですベル様!」

「流石と呼ばれるほどのことはしてないんですけど……いや本当に」

人材優秀と名高い『学区』の女生徒、ニイナの前に、命は驚嘆し、春姫は両手を重ねて少年を褒め称える。

それに対して、ベルは戸惑いながら後頭部を右手で擦った。

『学区』の変装入学が終わって、もう三日。

兎人の学生『ラビ・フレミッシュ』から第一級冒険者【白兎の脚】に戻ったベルは、一度【ヘスティア・プフミリア】に帰ってきていた。

校長神達には「引き続き『学区』に在籍してもらって構わない」と言われているが、ヘスティア達から「いい加減帰ってこい」と命令が下ったし、『学区』の教育体系の一つ『特別実習』も終わったので、いったん本拠に戻ることにしたのだ。

ベルが『学区』への特別入学を認められたのは、歴代最底辺の小隊『第三小队』の面倒を見るという交換条件によるものだった。『特別実習』を通して彼等彼女等の問題が改善され、無事校長神達の要望を達成した今、ちょうど区切りが良かったのである。

(あとは、僕の正体もイグリン達にバレちゃったし)

何より、校長神達との約束だったとはいえ、素性を偽って『第三小队』と接していたベルは正体が露見した今、気まずさを覚えている。

ドワーフのイグリンを始め、『ラビ・フレミッシュ』の秘密を知ってしまった『第三小

隊』の面々もどんな顔をして接したらいいかわからなさそうだった。ので、彼等のためにも一度距離と時間を置くことにしたのだ。

(うん、置くことにしたんだけど)

御覧の通り、ニイナの方から【ヘスティア・ファミリア】の本拠に押し付けてきたのである。校長神達から許可も頂戴した『派閥体験』という形で。

ベルとしては『何が何だか』といった気持ちの方が強い、というのが本音である。

「あ……」

「……! 」

驚きと戸惑いを半分ずつ抱えながら目を向けると、ちょうどこちらを窺っていたニイナと、ばっちり視線が合った。

どこか熱っぽい眼差しを向けていた年下の少女は、すぐに顔を伏せ、頬を赤らめる。

ベルはベルで25階層で打ち明けられた『キミの隣で沢山の景色を見たい』という告白にも聞こえなくはない激白紛いの発言を思い出し、ニイナと同じように赤面した——などということはなく、微笑ましそうに目を細めた。

つまり、

「あの時は変な風に言い間違えちゃって恥ずかしいんだろうなあ」

なんて考える始末であった。

周りにほとんど年上の女性しかいない弊害で、自分より年下になった途端、竜の娘や孤児院の妹分達に接するがでとき、強冒険者兄の立ち回りを行うトンチキ兎野郎と化していたのである。ニイナも優等生ながら「ラビ君、ラビ君!」と兄のように頼ってくれたところもあって、ポン・コッネルは無意識のうちにたく父性を刺激されていた。

ゼウス神は嘆き、神々の娘が極東殺刃を研ぎかねない惨状に、慈悲の女神ヘスティアは身を挺して眷族の尻をつねった。グニツ。ムギュリ。

「ぎゃあ」とトンチキ兎の悲鳴が散る。

「すみません、皆さん……お忙しい中、お時間を頂いて」

と、そてでニイナの『同伴者』が口を開いた。

もう一人の半妖精^{ハーフエルフ}、エイナである。

「どうしてこうなったとベル君にもその半妖精君^{ハーフエルフ}にも言ってやりたいところだけど……
ひとまず、なんで君までいるのかねアドバイザー君？」

「派閥体験^{インターン}最初の顔合わせはギルドの立ち合いが必須ですし、特別扱いするつもりはない
のですが…妹のことなので」

リリがLv2の体当たり頭突き^{たいあずつ}を無言でベルに繰り出し続け『ちょ、いたっ、ナンデ』と奏
でられる悶絶音^{もんぜつ}を背にしつつ、ヘスティアがじろりと尋ねると、エイナは眼鏡の位置を直
しながら実の妹を見やった。

「お、お姉ちゃんが来ると恥ずかしいって、私は言ったのに……!」

「私はベル君のアドバイザーだから、ほぼ【ヘスティア・ファミリア】担当扱いにされて
るって伝えたでしょ?ミィシヤ達も忙しいし……」

過保護^{かほご}の母を恥ずかしがる娘のように唇を尖らせるニイナに対し、彼女とそっくりな
エイナは手のかかる妹へそうするように言って聞かせる。その距離はぎこちなさを越え
て、長年過でした家族のように縮まっていた。二人の間で何があったか具体的にはわから
ない。だが、望んでいた姉妹の絆を取り戻しつつあるエイナとニイナの姿を見て、ベルは
嬉しさを隠さず微笑んだ。

今も脇腹^{わきばら}にリリの頭突きを食らいながら。

「ベル君への熱視線は頂けないが、『学区』の派閥体験^{インターン}は無碍^{むげ}にできないし……」

「ええ。将来有望な学生、何より貴重な治療師^{ヒーラー}という肩書き^{かたが}は見過ごせません……」

作戦会議とでも言うように、ヘスティアは頭突きを止めた参謀^{さんぼう}と顔を近付ける。

以前ベルに伝えた通り、第一級冒険者^{リユーカー}加入^{かにゅう}の一件もあって『Lv6が入ったので欲張

りません。学区の勧誘競争^{かんゆうきょうそう}は辞退するので他派閥の皆様につきましてはどうか我々を目
の敵^{かたき}にしないでください』という方針だったヘスティア達だったが、学生自ら志願^{しがん}して
くるとあれば話は別だ。

これ以上、団長の周り^{ベル}に女性を増やしたくないのは本音。

喉から手が出るほど欲しいLv2——上級冒険者並みの人材を獲得したいのも本音。

しかも、ニイナは強かった。

具体的には『治療師』という看板があまりにも強力であった。

前衛より稀少な後衛職の中でも純粋な回復職は圧倒的に少ない。その癒しの力は迷宮攻略に必ず寄与するだろうし、リリがいつも気にしている道具類の節約を格段に促す。というか、ここで突っぱねようものなら他派閥やそれを運営する神々から『アホか』という誹りは免れないだろう。それくらいニイナ・チュールは魅力的だ。

更に得点を重ねる要素として、仲間に加わっても問題の起こしようなない『学区』きつての優等生という点が挙げられる。

嘘や性根を見抜ける神の目から見ても彼女は処女神や【ファミリア】との相性がすこぶるいい(かつて戦開娼婦はここで弾かれた)。

リリとひそひそ話を重ねていたヘスティアは——派閥の安全を預かる主神として——面倒な乙女心を鋼の意思でおりゃーと投げ捨て、ニイナの前に手を差し出した。

「……派閥体験、歓迎するよニイナ君。君がこのままボク達の【ファミリア】に移ってくれるかはわからないけど、入ってくれたら嬉しいし、『やっぱや~めた』となればホッとするような気もするし……ええいつ、とにかくヨロシクー」

『は、はいっ! よろしくお願いします!』

差し出された手を握ったニイナは安堵と感動を覚えたようだった。

一方の女神は極東の梅干を食べたような顔をしており、命達の苦笑を買っていたが。

「で、こういう派閥体験って本拠に泊まり込みになるのかい?『学区』からの移動は一々面倒そうだし、空き部屋はいくつかあるけど…」

「はい。派閥側の許可が下りるのであれば、ギルドは本拠受け入れを推奨しています」

「実は、バルドル様から『絶対に大丈夫』って言われて、荷物も外に持ってきちゃってて……今からお姉ちゃんと取りに行ってきます!』

女神の確認にエイナが淀みなく答え、ニイナが少し恥ずかしそうにしながら、一度退出

しようとする。

「あ、僕も手伝うよ、ニイナ」

ベルはそこで自然に、少女の後を追った。

「大丈夫ですっ、ベル先輩!」

「べ……ベル先輩っ?」

返ってきた呼称に面食らった。

動きを止め、むず痒いような、調子が狂うような、奇妙な珍味を口にしたような、そんな

百面相を浮かべ、少々動転しながら訴える。

「そ、そんな畏まらなくていいよ。いつもみたいに呼んでくれれば…」

「いつもみたいに、って…ラビ君って呼ぶの?」

「う? ……」

ニイナは一瞬だけ、同級生に接していた口調に戻しつつ、上目遣いでベルを見た。

確かに偽名はまずい。

知らない人が聞けば混乱するという意味でも、ベルの良心的にも。

言葉に詰まったベルを見て、ニイナは気後れなく、どころか嬉しそうに破顔した。

「冒険者なら私の方が後輩なんだから、先輩って呼ばせて? ……ううん、呼ばせてください!」

「う、うん……わかったよ、ニイナ…」

「ありがとうございます! じゃあ、お姉ちゃんと一緒に荷物、取ってきますね!」

そう笑って、ニイナは姉とともに今度こそ居室を後にした。

どこか機嫌良さそうに、それこそ動物の尻尾のようにはねる茶褐色の長髪を見送ったベルは、やはり後頭部に手を置いてしまった。

「いいヤツそうだな、先輩」

「や、やめてよ、ヴェルフっ」

「貴方が先輩と呼ばれる日が来るとは……何やら感慨深くなりますね」

「リューさんまで……!」

重みが加わる右肩側に、片腕を乗せたヴェルフが愉快そうに口を曲げる。

左肩側には微笑を添えるリュウが。

弱^{よわ}りきってしまうベルは、もう一度ニイナ達が出ていった扉の向こうを眺めるのだった。

「はぁ~! 緊張した~~!」

館の廊下を歩きながら、胸に手を置いたニイナが大きく息を吐き出す。

しっかり者の彼女がこんな姿を見せてくれるのは、きっと姉だけなのだろう、と隣を歩くエイナは嬉しくも穏やかな思いを抱いた。

「お疲れ様。でも大丈夫だって言ったでしょ?神ヘスティアは神格者だし、ベル君達だって……」

「そこはバルドル様にも言われたから安心してたけど……『ベル先輩』って呼ぶ方が大変だったの! 強がっちゃったけど、私にとってはまだラビ君はラビ君だし……」

「あ、そっち……?」

「あ~、あの赤い目を見るとまだドキドキしちゃう! きっとこれからも、ずっとだよ! せめてラビ君の時の髪、被ってくれないかなあ?」

「それは無理だと思うけど……」

赤くなったり薄紅色になったりと、先程のベルに負けず劣らず百面相を繰り返すニイナに、エイナは溜息を我慢した。

他にも『ラビ君』に関わる一連の話を知って、身分を隠して『学区』潜入とは何事か、と叱ってあげたい気分だが、校長神や恩師^{バルドル}もグルであったのならエイナとしてはもはや何も言えない。お二人とも何してるんですか? と頭を痛めてしまうだけで。

疲れた頭のまま、まさか最愛の妹まで自分の担当冒険者のことを……などと考えていると、ニイナが立ち止まり、こちらと向き直った。

「それにしても、まさかお姉ちゃんまでベル先輩のことを好きだったなんて…これからライバルだからね!」

あ~姉妹考えることは一緒だなあ~、と。

一瞬^{げんじつとうひ}現実逃避をしたエイナは、ずり落ちかける眼鏡を慌てて押さえた。

「べ、別に私はベル君を好きなわけじゃあ……!」

「嘘だよ、お姉ちゃん。あれだけ赤い顔してたのに。それにお姉ちゃんがラビ君……ベル先輩のことを好きになるの、私わかるよ。お姉ちゃんにとって年下でも、私にとって年上

でも…うん、わかる。姉妹だもん」

妹にまさか諭^{さと}されエイナが口ごもっていると、ニイナは胸に片手を当て、頷きの一つ。

趣味は一緒。

なんだったら、我等^{チムール}一家の血はああいう系に弱い。

証拠は母さんとああいう系。

今にもそんなことを言い出しそうな妹に、エイナは頬に熱を集めながら口を塞ごうとする。

「それに……ベル先輩は第一級冒険者だもん。お姉ちゃんがそうじゃなくても、気を引こうとする人はいっぱいいるよ」

確かに事実として、既にベルは押しも押されもせぬ Lv5。

モテない方がおかしい地位にいる。

けれど

(ペル君は違う……ペル君をそういう目で見たくない……)

と、駆け出しの頃から見守ってきたエイナの根っこにして厄介な『姉心』が叫んでしまう。

『第一級冒険者の玉の與ペル・クラネル概念』はエイナの中で酷く^{かいしゃくちが}解釈違いであった。

『ペル君はこうもっとさあ、もっとさあ!』という悲痛^{ひつう}な叫びである。

一方、口を塞ごうとしたり途端^{もうのう}に懊悩し始めたりするそんな姉を不思議そうに往なしなが

ら、ニイナは^{ファイティングポーズ}対決姿勢をとった。

「でも、負けないから! お姉ちゃんにも、他の人にも!」

嗚呼、すっかり^{たいいくかいけい}体育会系になって。

眼差しは真面目、心も純真、けれど知らぬ間に『学区』に染まっている妹に、エイナは嬉しいような悲しいような気分になりつつ、一度目を瞑った。

やはり、言わなければならないことがある。

気付いた時にはもう手遅れになっていて、自分も挫けそうになっている『ある事実』を。

真の敵は別にいるのダー。

「あのね…ニイナ?」

「なに、お姉ちゃん?」

「ベル君、憧れてる人が……好きな人がいるよ？」

「えっ…えええええええええええええええええつ」

今日一番の妹の悲鳴に、エイナはほっそり尖った両耳に、指を差し込むのだった。